様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０１１７７

研究課題名（和文）社会教育における郷土意識の発現形態に関する研究

研究課題名（英文）A Study on expression forms of homeland consciousness through social education

研究代表者
大城　直樹（OSHIRO, Naoki）

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：００２７４４０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，沖縄固有の宗教施設である御嶽と近代になって国家神道化した神社の関係性について，とりわけ明治期以降第二次世界大戦終戦時までの社会教育との関わりから，人物や集団，またそれを取り巻く制度と宗教施設それ自体の在り方について検討を行った。具体的には，本土の研究者（鳥越憲三郎，河村只雄）による御嶽と神社の関係性に関する言説分析，高まるナショナリズムのなかでの，沖縄の人々自身（学校教育および社会教育におけるエージェント）による御嶽の神社への読み替え（立津春方，喜舎場永珣）の解釈，そして乃木神社の設置や桜の植樹などに見られる皇民化の担い手としての青年団活動の実態調査を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は1990年代以降の人文地理学における文化論的転回ならびに物質論的転回の文脈を踏まえ，文化地理学の立場から，景観や場所を構成するモノ（マテリアル）とそれを取り巻く諸関係，とりわけ政治的・社会的制度（ナショナリズムと皇民化）とその身体化・内面化・自明化を通じた発現形態について，情動（アフェクト）の局面に留意しつつ，具体的には，沖縄の御嶽と国家神道との関係性と社会教育を事例に検討・考察するものである。この種の試みは，欧米ではマイナーな研究ではないが，日本ではまだごくわずかしか行われていない。人文地理学の新たな領野を開拓していくためのの足掛かりとなるはずである。

研究成果の概要（英文）：This study examines the relationship between Utaki, a religious institution unique to Okinawa, and shrines, which became national Shinto shrines in modern times, particularly in relation to social education from the Meiji period until the end of World War II, and the nature of the persons, groups, institutions, and religious institutions themselves. Specifically, I analyzed the discourses of mainland researchers (Torigoe Kenzaburo and Kawamura Tadao) on the relationship between Utaki and shrines, the interpretation of Utaki as a shrine by Okinawan people themselves (school education and social education agents) in the context of growing nationalism (TATETSU Shunpou and KISHABA Eijun), and the establishment of Nogi Shrine I also conducted a survey of the activities of the youth organization as an agent of imperialization, as seen in the establishment of the Nogi Shrine and the planting of cherry trees.

研究分野：文化地理学

キーワード：郷土意識　社会教育　物質性　神社　御嶽　民俗　景観　場所

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

沖縄には日本本土の「神社」とは異なるものの，およそ産土神的な機能を有する古琉球の時代からつづく「御嶽（うたき）」なる宗教施設が存続する。とはいえ，女性神官が祭祀主体であったり，香炉が必ず設置されるなど，形態的にはいわゆる神社とは異なった様相をもっている。近代になって琉球王国から沖縄県へと諸制度が大きく変わると，それまで王府と関係が強かった宗教面の制度的形態も変更を余儀なくされていった。とりわけ 1940 年代に入ってすぐ，御嶽を国家神道の社格「村社」に位置づけるように読み替え，従来の一集落に一社存在し，他の集落のものは拝まないという慣習を超えて，複数集落（例えば行政村）に一社「村社」を設けることでナショナリズム涵養の場と為そうとした動き（御嶽村社化運動）が，沖縄県庁によって試みられたが，これは戦局の悪化で頓挫することになった。他方で青年団が勝手に己の集落の御嶽を乃木神社に読み替え，古老たちと対立することもあった。このことは社会教育によるナショナリズム浸透（＝皇民化）の一端を示すものである。また青年団によって，自主的に集落の祭祀施設（階段，祠堂，鳥居，石灯籠，玉垣等）や橋，道路などが整備されることも多かった。このような青年団活動という社会教育を通じて醸成された郷土意識の情動的な側面に着目して，それが集落景観に如何様に発現されるかに関心を持つに至った。

２．研究の目的

上記の背景から，本研究では，郷土意識の景観への発現形態の空間的バリエーションに留意することで，それらの差異について琉球列島を広域的に調査することで浮き上がってくる断絶や連続性を明らかにすることを目的とする。具体的には，少なくとも 1609 年の薩摩藩による奄美割譲までは，奄美諸島から，沖縄諸島，宮古・八重山諸島にいたるまで通底していたはずの御嶽信仰の（景観的，宗教実践的）現状を明らかにすることと，近世による支配体制の違いがもたらした差異ならびに近代初期の廃仏毀釈や国家神道化といった強権的な宗教介入による影響を明らかにすること，そしてそれらの地域的差異をタブロー（ある種の一覧表）化して示すことにある。そうすることで，見かけ上は産土神の杜としてある景観が，実のところはその構築物をめぐる意味を大きく変化・変遷させてきたことを照射してみたい。

３．研究の方法

当初は，如上のように琉球列島全域にわたる現地調査を行い，そこで得られたデータを比較対照させることで地域的差異を明らかにすることを目指した。またそれと並行して，近年の文化地理学において主要な概念である物質性（materiality）の問題系を絡ませて考えることとした。景観を構成する個々のモノ（マテリアル）は，けっして人間との関係の外には存在しない。A.ベルク風に言えば，それは「～としてある」のである。人間もまたそれらのモノに影響を受ける。その相互作用について，とりわけ情動（affect）の局面と関係している。このモノはまた，物体だけでなく，本来は関係性でしかないものが物象化されることであたかもモノのようになって我々の生活に深く作用する。諸々の制度や地域意識（郷土愛から愛国心に至るまで）などがその典型である。いわば身体化され自明化されるといってもよいであろう。本研究ではナショナリズムに重点を置いてそこのことに深掘りしていくこととする。

４．研究成果

（１）本報告では，沖縄固有の宗教施設である御嶽と近代になって国家神道化した神社の関係性について，人物や制度と宗教施設それ自体の在り方の一端を明らかにした。その際には，物質性 materiality の地理学という文脈を踏まえることとした。物質性とは，この場合，「モノ」が関係性の束によって構成されていることを意味する。よってモノは固体（物質）に限定されるものではない。琉球列島に固有の「御嶽」と呼ばれる祭祀施設は，多くは産土神や鎮守の杜と同様の形態をとっているものの，祭祀主体が女性神官であったり，拝殿やその奥にあるイビ（威部）と呼ばれる男子禁制の聖なる場所に香炉が置かれ線香が焚かれる等，神道的祭祀施設とは大いに異なる様相を呈している。その一方で，沖縄には「神社」も存在する。だがこれらの多くは神仏習合的形態をとり，氏子組織を持たず，一般民衆の祭祀対象となってはいない。こうした「神社」が，琉球王国から沖縄県へと大きく変化していく中で，近代になって如何様に沖縄の地で取り扱われるようになったのか，そして御嶽はそれとどう関係したのだろうか。

（２）それには「本土」の知識人の介入を見ておく必要がある。宗教学者・鳥越憲三郎（1914-2007）は，当時の沖縄県・早川知事のもとで「御嶽村社化」を図っていく。御嶽祭祀は基本的にムラ（村落）で完結しており，村の範域を越えて，他のムラの御嶽を拝むことはない。出征兵士見送り等，行政村というより広域のイベントでは，その空間的範域を表象する「村社」が必要と鳥越は考えた。実際に昭和 19 年５月に御嶽は神祇院により正式神社に認可され，県は町村に村社格神社を一社建立することを決定したものの，沖縄の「宗教改革」を進めた早川知事は解任され，その後着任した泉知事は「戦局の進展でお前の仕事はもう不要」とし，鳥越は嘱託を辞任。

この計画は頓挫することになった。鳥越とは別に，文部省直轄の国民精神文化研究所所員河村只雄（1893-1941）も，御嶽と神社の関係について，香炉を撤去し白砂に埋め，その上に神殿を建て，天照大神の神鏡を神体として奉安し，従来の神々はそれに合祀してはどうか，また他府県の神社と同様の神社の形式のもとに琉球の古神道的拝所を活かしてはと，人々に力説して回った。結局，これら本土の知識人による御嶽の神社の試みは実現しなかった。

（３）他方で，住民の自主的な形での「神社化」の動きがあった。名護城神社や各地に設置された乃木神社等がそれである。これらの動きには戦前の社会教育の主要な場のひとつであった青年会（青年団）が深く関与している。青年会（団）の主な活動は，生活規範の徹底や生活基盤の向上，具体的には（農村の場合は），農事の奨励，補習教育の実施，風俗の改善，基本財産の蓄積，公共事業の遂行などであった。沖縄県の場合，その指導に当たったのが学校教育の担い手である小学校長であった。日露戦争後の 1908 年に「国民精神作興に関する詔書」である「戊辰詔書」が発布された。この詔書の発布後，県下では急速に青年会（団）が発足していった。例えば 1909 年に結成された国頭村の辺土名青年会では，早速，裸足禁止，草履・下履き励行，毛遊びの禁止を謳い，風紀（つまりは身体）の監視・管理の実践を行うようになり，２年後の 1911 年には，一部の民俗信仰や年中行事の廃止を叫ぶようにもなった。だが青年会は，監視的・抑圧的な活動だけでなく，石橋の架設や河川改修・開削を行ったり，拝山（村落背後の丘）に遊歩道を設けて公園整備を行ったりもした。また集落背後の山麓に桜の木々（無論「日本」の象徴として。沖縄ではソメイヨシノは育たず台湾原産の寒緋桜）を植栽してもいる。名護さくら祭りで知られる名護市の名護城の桜は，大正初めに名護の青年団によって 50 本ほど植栽されたのを嚆矢とするが，同時に名護城神社も造営された。この名護村青年会は 1911 年に発足している。国頭村の奥集落の祭祀行事は，戦前は「青年会を中心とする迷信打破運動によって非常に簡素化され」たが，それは「部落（ママ）の幹部の協力を得て強力に推し進められてきた」ものであった（琉球大学民俗研究クラブ，1965）。その延長で 1914 年に青年会は，集落の御嶽に乃木将軍の愛国心を讃えて同将軍の半身像を安置し乃木神社とした。だが，こうした思考／実践は年配の人びととの間に御嶽や民俗的実践をめぐる表象の分離・対立（祭祀対象の空間スケールの齟齬）を生むこととなった。この奥集落の乃木神社も，第二次世界大戦後には部落役員会において廃止が決定され，御嶽祭祀は復活した。敗戦を期に青年会の表象と実践は覆されることとなったのである。なお，奥集落では約 150m の「青年道」が 1907 年に敷設されたが，これも青年会の労力と積立金によって造られたものであった。在来の知・思想の弾劾によるコミュニティの分断とローカルな生活環境の改善への努力といった，今日からみれば矛盾しているかのように見える青年会の集落内での存在のあり方（教化，労力，結果としての景観形成力など）からモダニティと在来知／実践との拮抗／整合的な関係性について考えさせられる。

（４）現存はしないが，石垣島にはかつて八重山神社が存在した。その設置に尽力したのが喜舎場永珣（1885-1972）である。喜舎場は小学校教員（後に校長）を勤め，八重山の民俗研究に勤しんだ人物である。1932 年の依願退職後は，様々な委員や会長に任命・選出され，学校教育のみならず社会教育においても重要な立場に就いた。民俗に詳しいその彼が，八重山神社という本来その土地には存在しなかった宗教施設の新設（1940 年の皇紀二六〇〇年に合わせて）に「神社設立委員長」として携わることになった。当初は「三所権現」を祭神として南海山権現堂を「神社」に「昇格」させて，県社波上宮の末社として登録しようとしたものの，「神社明細帳」に登録されていなかったため「神社」としては認可されず，替わりに字大川の大石垣御嶽とその敷地が「八重山神社」とされた。結果的に御嶽が神社に読み替えられたのである。「民俗」への深い理解があるがゆえの葛藤が，神社建立の際に無かったとは言えないだろうし，時局の動きと自身の知識の接合に深刻な葛藤があったことが想定できる。戦後，「八重山神社」は再び大石垣御嶽に戻っている。

（５）宮古島の宮古神社についてみると，八重山神社と同様に前近代から存在する「熊野三所大権現」を一つの基礎とするものであるが，その前身として 1925 年に，平良町（現宮古島市）が宮古創建の祖・二柱（与那覇恵源・仲宗根玄雅）を祭神とする「町社」宮古神社を創設していた。1940 年に権現堂と併せて新宮古神社の建立と相成ったが，そこに至る前に，この計画に反対の異を唱える者がいた。元学校教員（後に校長）の立津春方（1870-1943）である。彼も永珣同様，青年会の会長に選任され社会教育の任も負うことになったが，彼はまた宮古神社に隣接する祥雲寺の住職でもあった。そこを拠点に修養団体を組織し支持者を集めて農民党を結成し，県議，平良村長を務めるなど，教育者から政治家へと変身していった。1940 年の宮古神社移転造営計画主体は，宮古神社奉賛会であり，宮古支庁長護得久朝昌が音頭をとったものである。立津が反対した理由には，権現堂との合祀があった。護得久は「権現堂の神様が波上宮の分身でありますので，将来神社が立ちますれば，どうしても之が社格を頂かねばならないのです」としたが，立津はこれに真っ向から反対し，二度も県知事宛に反対案を提出した。「護得久会長の企図するごとく神仏合体の権現を主神として神社を建設することは明治二年の太政官の政令にそむき及び現国策の主旨にもそはざる愚盲の挙である」からであるという。そもそも波上宮は既に神仏分離を行っていたにもかかわらず，春方の意見は組み上げられなかった。

（６）八重山神社は第二世界大戦後に消失したが，宮古神社は現在もなお新たな社殿を造営するぐらいに壮んである。この両者の違いは何を示すのであろうか。同じく小学校の教員としてキャリアを始め，校長を務めることで後に社会教育にも深くかかわっていった永珣と春方であるが，学究肌の前者と政治家となった後者では，地域的コンテクストにおけるそのエージェントとしてのキャラクターは大きく異なるものであった。とはいえ，彼らのパーソナリティーのみをもって，二つの神社の顛末を還元することは出来ないであろう。石垣島では大石垣御嶽が八重山神社に読み替えられ，皇紀二六〇〇年を記念して大運動会が行われていたが，『八重山写真帖』（2001年）を見ると，現在は海星小学校の敷地となっているものの，戦後すぐには運動場の跡地で八重山建築競技大会が行われたり（1949 年），八重山復興博覧会（1950 年）が行われたりしている。戦後すぐには米軍の施設も置かれていた。同じ場（空間）であっても，その用途，そしてそこへのまなざしは変わる。変わらないのはいずれの写真の奥に見える御嶽とその杜である。とはいえ，そこも一時的にではあれ国家神道の神社とされていたことは事実である。また，市や郡のイベントの会場という「機能」は同一といえる。だが，機能は同じでもその「モノ」との関係性は大きく変化している。このように，些細な地物から建造環境に至るまで，我々は多くの「モノ」に囲まれているし，それらとの多様で変質する関係性の中にある。

（７）結論として言えば，こうした動きのベースにあるのは，在来の「その土地固有の vernacular」知＝実践であり，知・制度・具体的なマテリアル，この三者の偶有的な接合関係が，その知＝実践をめぐって介入・介在するということである。ただし，マテリアルなものには２通りあることに留意しなければならない。一つはタンジブル（触知可能，可視的）なモノであり，例えば景観構成物（御嶽，神社，桜）がそれにあたる。もう一つは本来関係の束に過ぎないが，物象化されてあたかも物質のようにしてあるモノである。だがこれには心性や情操などが連関し，時として身体化された情動として発現することもある。

（８）本研究では半世紀ばかりの沖縄の風景，特に宗教景観について見てきたわけであるが，それらの風景は，現在もなおそこに現前している。とはいえ，風景のマテリアル（モノ）をめぐる，知と制度と具体的地物の三者関係は大きく変容してきた。このように，些細な地物から建造環境に至るまで，我々は多くの「モノ」に囲まれているし，それらとの多様で変質する関係性の中にある。これらの「モノ」は，時代（時間）と場所（空間）によって，多様に分節され，かつ接合されるわけであるが，その都度の「場所」の生成，並びに新たな関係性の創発という事態が起こるのもまた事実である。タンジブル（触知可能）な「モノ」のみならず，同時に，ナショナリズムをはじめ，本来関係的なものがあたかも揺ぎ無き「物質」のように我々の生活に作用する事態についても併せて，景観読解の際には，関係論的な視座から考える必要がつねにあるだろう。

（９）本研究は 1990 年代以降の文化論的転回の流れに竿を差すものであり，人間主義地理学と唯物論的思考を接合させる試みであったといえる。後者は物質論的転回として欧米で評価されるものであるが，日本では既に戦前から続く知的営みであったといえる。2023 年度人文地理学会特別研究発表の際の座長・森正人の評価を見れば，物質性と情動の関係性を探る報告者のスタンスは明らかとなるはずである（人文地理 76-1，2024）。とはいえ，課題は残されている。ひとつはコロナ禍によって阻まれた広域的な地域調査である。今回は八重山では宮古島・石垣島しか扱えなかったし，他は沖縄本島に限られていた。八重山諸島の他の島，また沖縄本島周辺の離島，そして奄美諸島にも足を延ばして，今回得られた成果との比較のために現地調査をする必要がある。ぜひ次の機会を探りたい。他方で，森の指摘するように，アクターネットワーク理論が前提とする「事物の力能」への更なる配慮は必要である。事物は常にネットワーク化されるのか，あるいは，事物は通常は隠退しており特定の契機においてのみ力能を発揮するのか，このことについて事例を精査し考究を深めていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 大城直樹	４．巻 172
２．論文標題 宮古神社移転顛末―予備調査報告-	５．発行年 2021年
３．雑誌名 駿台史学	６．最初と最後の頁 83-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大城直樹	４．巻 71－2
２．論文標題 書評：平岡昭利・須山　聡・宮内久光編『図説　日本の島―76の魅力ある島々の営み』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人文地理	６．最初と最後の頁 184－185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4200/jjhg.71.02_184	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大城直樹	４．巻 201906
２．論文標題 ポストモダン地理学とは何であったのか？	５．発行年 2019年
３．雑誌名 １０＋１（テンプラスワン）website	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大城直樹	４．巻 90
２．論文標題 グレゴリーのルフェーヴル論―補遺	５．発行年 2023年
３．雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	６．最初と最後の頁 30-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 大城直樹
2．発表標題 宮古・八重山の御嶽と神社の位相
3．学会等名 日本地理学会秋季学術大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 大城直樹
2．発表標題 御嶽と神社のあいだ―民俗と社会教育の関係性について―
3．学会等名 人文地理学会大会特別研究発表（招待講演）
4．発表年 2023年

〔図書〕　計4件

1．著者名 竹中克行編（大城：分担執筆）	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 290
3．書名 人文地理学のパースペクティブ	

1．著者名 大城直樹（共著）	4．発行年 2021年
2．出版社 以文社	5．総ページ数 443
3．書名 惑星都市理論	

１．著者名 大城直樹（共著）	４．発行年 2021年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 219
３．書名 図説世界の地域問題100	

１．著者名 大城直樹（共著）	４．発行年 2022年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 298
３．書名 東京の批判地誌学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関